

現代
韓国社会叢書

滝沢秀樹・安秉直編

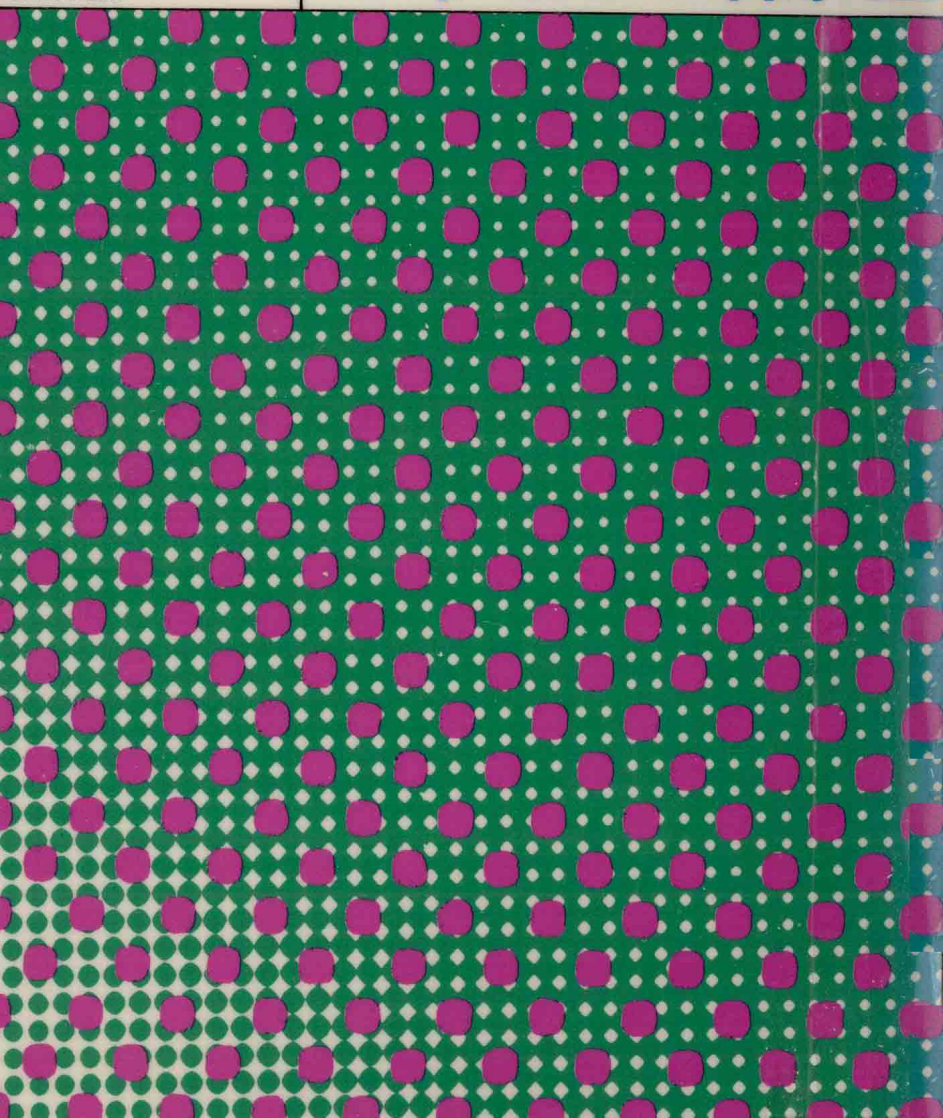
4

白楽晴著

滝沢秀樹監訳

●御茶の水書房

民族文化運動 の状況と論理



韓国現代社会叢書 滝沢秀樹・安秉直編

4

白樂晴著・滝沢秀樹監訳

● 御茶の水書房

氏族文化運動の状況と論理

韓国現代社会叢書第4巻（全5巻）

民族文化運動の状況と論理

発行——一九八五年二月一八日 初版第一刷

定価——二五〇〇円

著者——白 楽晴

監訳者——滝沢秀樹

発行人——橋本盛作

発行所——株式会社御茶の水書房

〒一〇二 東京都千代田区九段北一―八―二

電話〇三（二六五）五七四六／振替東京八一四七七四

装幀——安達史人

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

ISBN4-275-00630-5 C0036

Printed in Japan

監訳者紹介

滝沢秀樹（たきざわ・ひでき）

一九四三年（昭和一八年）、富山県に生まれる。東京大学経済学部卒業。現在、甲南大学経済学部教授。専攻・近代日本経済史、韓国現代史。著書に『日本資本主義と蚕糸業』（未来社）、『ソウル讃歌』（田畑書店）、『韓国民族主義論序説』（影書房）ほか。訳書に朴玄採『韓国資本主義と民族運動』（小社刊、本叢書第2巻）。

『韓国現代社会叢書』の刊行にあたって

社会の現実を正確に把握して将来を展望すること、さらにはすすんで将来の展望にあたつての何らかの指針を提供することに、社会科学なり人文科学なりが何らかの貢献をなし得るとすれば、それはおそらく「無限に豊富な現実」の前に膝を屈して社会の体系的認識を放棄することによってではなく、「無限に豊富な現実」の様々な諸事象のなかで「何が真に現実的なものか」を科学的に追求しようとする姿勢によって可能になるであろう。ここで「真に現実的なもの」とは、歴史に内在している、歴史を変革し、歴史を形成する力を意味することは、言うまでもない。だから言い換えれば、それは現代社会の諸事象を「歴史としての現代」の視点で切開していくことでもある。

今日の韓国社会や日本社会、そして日韓関係について正確に認識しようとするとき、そうした「真に現実的なもの」をとらえる視点の必要性が、とりわけ切実に感じられるように思う。一九六五年の「日韓正常化」から二〇年を経た今日、「日韓新時代」に合流するかのように登場してきた、日本での「新しい未知の韓国像」論や韓国での「克日」論が、実は「真に現実的なもの」への視点をくもらす

効果を生んでいるのではないかという危惧は、いっそうそのような視点の必要性和緊急性を痛感させるのである。

本叢書はこのような認識のもとに企画されたが、ここでは韓民族の自主的發展を追求する若干の知識人の論文を日本の読者に紹介することとした。われわれがこのような意図をもつようになったのは、まず、日韓交流関係とはいってもそれは主として日本文化の韓国への流入であり、そのために日本近現代史の展開は日韓関係を抜きにしては到底正しく認識することができないにもかかわらず、日本国民の間には韓国に対する関心が不足していること、また、もし日本人が韓国を正しく認識しようすれば韓国人の自主的發展のための努力を無視しては韓国を正しく理解することができないと思うからである。したがってもしわれわれが「正しい日韓関係の展開」のためににかしななければならないとするならば、それはこのようなことから出発しなければならないのではないかと考えるのである。

ここで試みられる韓国社会の体系的認識への努力は、従って、単なる韓国語の論文の日本語への翻訳、日本での発表という形にあらわされたものにとどまるのではない。企画にあたって編者・著者・訳者が確認したのは、(1)「日本での発表」を前提とした各著者による新しい構想と構成による書物とすること、(2)そのためには既発表の論文に加筆・修正を加えると同時に、必要に応じて新しく書きおろした論文も含めること、(3)その内容が、韓国社会に内在する「真に現実的なもの」をとらえる視点を与えようとするものであること、(4)以上の点について編者と著者・訳者が原則的に一致することを前提とすること、であった。だから本叢書は文字通り著者・訳者・編者の共同労作である。

もちろん、本叢書の各巻の著者が「歴史としての現代韓国」を視る眼は完全に同じではないし、それぞれが依拠する理論的・方法的立場にも相違する点がないのではない。まして編者や日本人の訳者との間でその内容の具体的な点にわたって意見が一致しているのではない。これはあまりにも当然のことではあるが、本叢書が何らかのあるべき規範（規格）を前提とするのではなく、まったく自由な雰囲気で作画がすすめられてきたことを、とくに強調しておきたい。

にもかかわらず、ここには全体としてひとつの方向性が示されている。それは、民族分断・対外従属・民主主義の未実現という韓民族の現状を固定的にとらえるのではなく、民族形成史のなかで民衆を主体とした自由・民主・独立・統一を展望しようとする方向であり、日本側の編者・訳者からすれば、そのような指向をもった韓国の民族知性による知的営為への共感である。そのような指向こそ、韓国社会における「真に現実的なもの」であるとわれわれは考える。

本叢書の各巻がそれぞれ具体的に提起している問題が何であるのかについては、各巻の「著者序文」と「訳者解説」で触れられるはずであるが、とりあえず各巻の主題をここで示しておけば、第一巻、李泳禧『分断民族の苦悩』は民主主義の実現をめざす分断時代を生きる韓国民衆の苦悩とその新しい歴史形成のための陣痛としての意味を、第二巻、朴玄採『韓国資本主義と民族運動』は自立経済の実現のための理論的武器としての民族経済論を、第三巻、姜萬吉『韓国民族運動史論』は民族運動の指導路線と民族国家建設論としての社会民主主義論を、第四巻、白樂晴『民族文化運動の状況と論理』は民族運動としての民族文学論を、第五巻、安秉直『日本帝国主義と朝鮮民衆』は日帝植民地支

配下の朝鮮社会を植民地半封建社会と性格づける立場からの、民族運動の主体としての民衆論を、それぞれ著者独自の立場で体系的に明らかにしようとするものである。

以上の五つの主題が、今日の韓国社会の「歴史としての現代」のもつ主要な側面をつくっていると考えるのではない。とくに近現代の政治過程をそれ自体として対象とするものや、近代以前の歴史過程との接点の追求を試みるものが含まれていないことは、さしあたり本叢書のもつ大きな弱点であろう。われわれは、できれば第二期・第三期へと叢書を引き継いで、より満足すべきものにしていきたいという夢をもっている。

当初、企画についての話し合いがはじまったころ、われわれはいくつかのテーマ別の複数の著者による論文集という形についても考えてみた。そのほうが多様な形での論議を紹介し、問題の所在を明らかにするのに有効ではないかと考えたのである。しかし、結局は著者一名ごとに一冊という形にすることに期せずして意見が一致した。何よりも必要なのは、「多様な意見の存在」をそれ自体として知ることよりも、「ある体系化されたもの」の提示であると考えたからである。

われわれ二名が共同でこのような企画をもつことになったきっかけは、一九八二年度の一年間、滝沢がソウル大学校経済研究所に客員研究員として滞在した時、安秉直の大学院の演習にも参加しながら、日常的に学問的対話の機会をもったことであった。日韓双方で学術書の翻訳はそれなりに活発に行われるようになってきているとはいふものの、前にも指摘した通り未だ大部分が一方通行なのが現状である。その意味でも、二人の編者が双方の窓口となって連絡をとりながら、著者との正式の出版

契約を結んだうえで、訳文もいったん著者による点検を経るという原則をもった本叢書の刊行は、これからの日韓の民間レベルでの学術交流にとっても意義のあるものと、われわれは考えている。本書に御協力いただいた著者・訳者の方々、および昨今の困難な出版事情のなかで刊行をひき受けていただいた御茶の水書房の橋本盛作社長に、心からお礼を申し上げます。

一九八五年二月

甲南大学経済学部教授
ソウル大学校経済学科教授

滝沢 秀樹
安 秉直

はしがき

『韓国民衆文学論』（『韓国民衆文学論 白樂晴評論集』安宇植編訳、三一書房、一九八二年）という書物を通して日本の読者と初めて出あってから、いま再びこのような機会をもちえることになった。前回の書物に収めたのが主に一九七〇年代に発表された論文であったのに対し、この度は一九七九年の「一〇・二六事件」（朴正熙大統領の射殺事件）直後に書いた短い一編を除いては、すべて「第五共和国」（朴政権時代の「維新憲法」にかわる「第五共和国憲法」）にもとづいて一九八〇年一〇月にスタートした現・全斗煥政権の体制）樹立以後のものを選んだ。しかし大きくみて二冊の本は、一つの連続した作業であるとみなせるだろう。持続的なこの作業を韓国民衆文化運動の実情点検、およびこのような点検の一環としての理論的模索として解釈する意味で、題を「民族文化運動の状況と論理」とした。実際、論議が文学に偏重したのは、文学を専攻した筆者個人の事情がもちろん作用している。しかし民族文化運動の現段階で文学が占める比重が小さくないのが、今日の実情であり、今後他の分野がより活発になっても、生氣ある文学論議が、常に運動の中心にあらねばならないというの

が私の信念でもある。ともあれ、本書に収録した論文は、すべて一九八〇年代のわれわれの歴史が要求する民族運動、そしてその一翼としての民族文化運動に多少なりとも具体的に寄与できたという思いで書かれた。発言は、つねにその時々、の現実的制約を意識した発言である。発表誌と時期を文章の最後に明示したのもそのような意味からである。

『韓国民衆文学論』でと同様、この書物でも「民族文学」への関心が中心をなしている。実のところ、訳者と出版社側がつけてくれた前回の書物の表題に対して筆者自身は少し過分に思っている。もちろん筆者は民族文学を語る前から民衆文学を論じていたし、民族文学論は、すなわち一種の民衆文学論でもあるが、無条件「民衆文学論」だといゆる論議を、筆者としては、未だ一つの課題として残している。

ところで筆者自身の作業がもつこのような限界とは別に、「民族」という言葉そのものに、ある違和感をもつ人々が、韓国以上に、日本の知識人の間にも少なくないかもしれない。かりにそうだとすれば、それがはたして常に望ましい現象であるのか、ここで問うてみたい。民族主義の両面性、そしてこれに伴う膨大な害悪の可能性については、少なくとも韓日両国の知識人には異なる説明を要するくらい、両国現代史の教訓がなまなく、痛ましい。しかしそのために、今日第三世界の民族運動が即ち、全地球的民衆解放運動の重要な前衛であることを看過したり、その民族的性格を単に避けたい落後性の一部だと寛大にみなしてやる態度が、先進的認識を意味するものではないと思う。韓国の民衆運動と連帯しようとする日本の友人たちが、そのような態度をもち続ける限り、まずはその連

帯の幅と深みに厳然たる限界がひかれるだろうが、それよりも日本の民衆の中に、依然として無視できない現実として残っている民族感情、民族意識を最初からあつさりと国粹主義者に譲り渡して、果してどれだけの実質的なしごとを——外国の民衆はさておいて、日本人自身のために——やりとげられるのか疑わしく思えるのである。

ともあれ筆者は、韓国の民族文学と民族文化運動に関するたいしたこともない論文をいくつかお見せしながら、海のむこうの隣人たちが、もしかしたら自らの問題と全くかけ離れてはいないものとして読んで下さり、批判でもしていただけたらという願望をすてきれない。それが即ち、両国民衆の紐帯にもう一つの小さなプラスになり、われわれの民族運動においても新たな進展をもたらすだろうと信じるからである。筆者は、科学技術以外にも日本の民衆と知識人の貴重な経験は多いと信じるし、両国民衆間の相互尊重というものが、どちら側においても空言ばかりである必要はないのだと思う。ただ権勢と金脈を握っている人々どうしで、好きほうだいひっぱっていく韓日交流「新時代」のすきまに、時あたかもこの書物が入りこむのには錯雑な思いがする。いや、民衆が架けた橋の上に民衆が自在に往き来しうる日まで、文化交流というものを延ばせるものなら、日本の読者と出あえる筆者個人の楽しみくらいは返納する用意もある。しかしいづれにせよそのような便利な注文を認めてくれないうとする両国知識人間の連帯を確認する事業にも力を傾注しなければならぬだろう。

そのような点でも、この本の発刊に尽力して下さる訳者、編者の方々、そして出版社の皆様を重ね

て謝意を表するしだいである。

一九八五年九月

ソウルで

白^グ
楽^ナ
晴^{チヨ}
ン

民族文化運動の状況と論理

目

次

『韓国現代社会叢書』の刊行にあたって
はしがき

八〇年代民族文学論の展望…………… 3

——一九七〇年代の幕を閉じるに際して——

第三世界文学への視点…………… 19

民族文学の新たな転機を迎えて…………… 31

一 はじめに…………… 31

二 分断時代についての認識の前進…………… 33

三 分断克服の文学とリアリズムの課題…………… 57

四 和解について…………… 87

韓国におけるアメリカの意味…………… 93

——民族文学論の視角から——

学問の科学性と民族主義的实践

115

——「人文科学」の問題と関連して——

一 はじめに

115

二 人文学と人文科学

118

三 科学の科学性についての問い

130

四 民族的主体性と学問的普遍性

149

一九八三年のムック運動

171

一 一九八三年の新しい様相

172

二 文学における時代論と世代論

175

三 七〇年代の文学的状况についての認識

179

四 「市民的展望」の問題

182

五 民衆志向的文化運動の拡散

187

六 地方文化運動の論理

191

七 専門性についての批判

196

八 共同体に関する論議

203

九 実践と実践論 209

一〇 新たな民衆文学論の可能性 212

一一 おわりに 218

追記 219

民族文学と民衆文学 225

一 文学性の弁証法的認識 226

二 七〇年代の民族文学論と今日の民衆文学論 232

三 文化運動における理論と組織の問題 239

西洋名作小説の主体的理解のために 247

——トルストイの『復活』を中心に——

監訳者あとがき 289

本文中の(……)および(1)(2)……は著者による注であり、〔……〕は訳注である。

民族文化運動の状況と論理